

なぜ感受性なのか(2)

村上吉男

『デカルトにおける科学と知覚』(1930年)は表題通り、シモーヌ・ヴェーユをしてデカルトの科学と知覚について考察せしめるが、果たしてその考察のみにとどまる学士論文なのであろうか。

彼女がデカルトの科学と知覚を個別にはなく、知覚における科学という関連、別言すると科学はデカルトの主張する知覚から成り立つ関連で捉えるのは、かつこの科学が彼女にあって批判されるのはいうまでもないことである。

しかも知覚における科学という関連での科学への批判は当然、一方の知覚さえもが彼女の批判を免れるものでないことを示唆させよう。このとき筆者は、学士論文にはその基調としてあり、そのうえ密かに展開される彼女独自の知覚が認められるし、それこそがデカルトの知覚批判に立ち向わせ、デカルトの知覚あるいは科学の考察だけに終始させない事由になると読むことができるのである。

今回の論稿ではもっぱらデカルトの知覚が何か、彼女独自の知覚が何かが問われねばならないのであって、デカルトやシモーヌ・ヴェーユの科学が何かを問うところにはないのである⁽¹⁾。ここで付言するにせよ、それは彼女のみる科学も彼女独自の知覚によって成るということでしかない⁽²⁾。

学士論文は序論・第一部・第二部・結論の各部で組立てられるが、彼女独自の知覚にかかわる部は第二部である。彼女独自の知覚はそこに密かな展開をもってはじまり次第に明かされるのみならず、他の部においてさえそれらの土台とならざるを得ないものなのである。

なおたとえば、この第二部は周知の一方にいう三段構成法(序論・本論・結論)における本論、他方にいう漢詩の絶句の作詩法(起・承・転・結)における転、第一部は前者でいう本論、後者でいう承に該当していよう。

ところでこの学士論文に彼女独自の知覚が基調になると指摘するかぎりは、

それが何かをここに明確にさせる必要があるが、しかしそうするには何より彼女が独自の知覚を打ち出さんとして、デカルトの知覚をばその起・承・転・結の各部にわたっていかに述べるかを概観せねばならないのである。

起たる序論において、知覚すなわち思惟が提起される。彼女は人類が誕生してこのかた、〈そのとき⁽³⁾まで感じたり、推測したりだけした〉⁽⁴⁾という思惟の形態の時期を除いて、人類の思惟のそのほとんどがデカルト的思惟にほかならなかったという。さらに、このデカルト的思惟は当のデカルトにとって〈真なる思惟(pensée véritable)〉⁽⁵⁾、〈純粹な思惟(pensée pure)〉⁽⁶⁾、また〈万人に共通な思惟(pensée commune)〉⁽⁷⁾になろうが、しかし彼女には〈氣違いじみた思惟(pensée folle)〉⁽⁸⁾でしかないとみなされる。なぜなら彼女にとって、〈氣違いじみた思惟〉は、デカルトに〈疑わしい思惟 pensée incertaine)〉⁽⁹⁾ともいわれよう 〈感覚と情念との印象に委ねられたとりとめのない思惟(pensée errante, livrée aux impressions des sens et des passions)〉⁽¹⁰⁾とはほど遠い思惟を意味させるからである。

起の問題提起を受け発展させる承たる第一部において、彼女はまさに、そのデカルト的思惟とは何かを明かす。デカルト的思惟はそれを前段でみた引用文で示せば、註(4)の〈感じたり、推測したりだけした〉要素、註(10)の〈感覚と情念との印象に委ねられた〉要素を排除する思惟になる。だからこそこで彼女はこのデカルト的思惟を〈氣違いじみた思惟〉と記すごとく駁撃し、かつデカルトを〈見掛け倒しの思想家(penseur fictif)〉⁽¹¹⁾とすらしい放つのである。以下は彼女が起を踏まえて第一部に語るデカルト的思惟である。

Lorsque Descartes veut chercher la vérité, il ferme les yeux, il bouche ses oreilles, il efface même de sa pensée toutes les images des choses corporelle. …Ainsi la première démarche de Descartes pensant est de faire abstraction des sensations.⁽¹²⁾

デカルトが真理を探し求めようと望むとき、彼は目を閉じ、耳をふさぎ、物質的事物のすべての表象を自分の思惟から消し去ってしまいさえする。…かくて、思惟するデカルトの最初の手続きは感覚(的印象)を考慮に入れないことにある。

Il (Descartes) a transporté la connaissance de la nature du domaine des

sens au domaine de la raison. Il a donc purifié notre pensée d'imagination.
(括弧内筆者)⁽¹³⁾

彼（デカルト）は自然に関する認識を、感覚の領域から理性のそれへ移した。それゆえ彼はわたしたちの思惟を想像から清めたのである。

Être cartésien, c'est douter de tout, puis tout examiner par ordre, sans croire à rien qu'en sa propre pensée, dans la mesure où elle est claire et distincte.⁽¹⁴⁾

デカルト的であることは、すべてを疑うこと、次いで明晰かつ判明であるかぎりにおいて、その自分自身の思惟のほかには何も信じることなく、すべてを秩序立てて吟味することである。

なおまた彼女がデカルトを駁撃するとみることには次の引用文が相当しよう。
すなわち、

Quoi d'étonnant à ce que nous ne trouvions en Descartes qu'obscurités, difficultés, contradictions ?⁽¹⁵⁾

わたしたちがデカルトのうちに不明瞭、難点、矛盾しか見出さないということに、これほど驚くべきことがあろうか、と。

転たる第二部において、彼女はそれまで述べてきたデカルトの知覚（思惟）から、彼女独自の知覚（思惟）に転換させる。彼女独自の知覚の表明はデカルトの知覚を考究して生み出されたのではなく、かかる知覚はゆるぎないものかどうかは別にして、学士論文の起稿以前にすでに彼女にあったと推察されるそれである。それは並居る思想家や哲学者の知覚説（認識論）があるうち、彼女独自の知覚をきわだたせるにデカルトの知覚説の選択がもっとも有効だったからである。彼女独自の知覚の支えなしに、どうして論文全体がデカルトの知覚批判の姿勢で論じられるような構成によって成立するのであろうか。

ともかく彼女独自の知覚は第二部の冒頭部分に照し出されるとみてよい。すなわち、

Nous sommes des vivants; notre pensée s'accompagne de plaisir ou de peine. Je suis au monde; c'est-à-dire que je me sens dépendre de quelque chose d'étranger que je sens en retour dépendre plus ou moins de moi. ① Selon que je sens cette chose étrangère me soumettre ou m'être soumise, je sens plaisir ou peine. ② Tout ce que je nomme des objets, le ciel, les nuages, le vent, les pierres, le soleil, sont avant tout pour moi des plaisirs, en tant qu'ils me manifestent ma propre existence; des peines, en tant que mon existence trouve en eux sa limite.⁽¹⁶⁾ (傍線部分や①②は筆者)

わたしたちは生きものである。わたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている。わたしはこの世界に生きている。つまり、わたしはわたしが外来的な何かに依存するのを感じたり、逆に外来的な何かがわたしに多少とも依存するのを感じたりする。①その外来的な事物がわたしに従うのを感じるか、わたしが外来的な事物に従われるのを感じるかに応じて、わたしは快あるいは苦を感じする。②わたしが対象と名付けるすべてのもの、たとえば空、雲、風、石、太陽は、これらがわたしにわたし自身の存在を明らかにするかぎり、わたしにとってとりわけ快であり、わたしの存在がそれらの対象のうち自らの限界を見出すかぎり、苦である。

結たる結論において、彼女は転から一転させてもとのデカルトの知覚の問題に立ちもどり、これを転の彼女独自の知覚からみる結語でしめくくる。それはここでも転の第二部と同様、冒頭を飾る部分にある。すなわち、

Cette aventureuse suite de réflexions une fois terminée, il apparaît qu'elle s'écarte de la doctrine cartésienne au point de sembler parfois y contredire. Il serait étonnant pourtant qu'une pareille esquisse, si tâtonnante, si insuffisante soit-elle, du seul fait qu'elle imite le mouvement de la pensée cartésienne sans la suivre, ne l'éclairât pas dans une certaine mesure. Peut-être permettra-t-elle en effet d'entrevoir comment peuvent se résoudre les contradictions apparentes précédemment relevées dans Descartes, et quelques autres difficultés.⁽¹⁷⁾ (傍線部分筆者)

この一連の考察の冒険によって、それはここに至ると、ときにデカルト説に反論を加えるように見えるほどに、そのデカルト説から遠ざかることが判明した。それでもこのような素描が手さぐりであり不十分であるにせよ、デカルトの思惟に従わずに、ただその動きを模倣するという事実だけによっても、このデカルトの思惟の

動きをある程度まで明るみに出さないならば、それは驚くべきことであろう。多分、この素描は、先にデカルトにおいて指摘された諸矛盾およびその他のいくつかの難点がいかにして解決され得るか、実際かいまみることを可能ならしめるであろう、と。

結論は他の部の、なかでも第二部の質や量においてまさる内容に比すまでもない。これは、他の部における彼女の主張の、およびねらいの要約やその強調にあるとみられるかぎり、内容が質量的に拡大されないのが当然なのである。

筆者は繰返すまでもなく、『デカルトにおける科学と知覚』と題されたデカルトの知覚を問題にするといったが、結論までみたわたしたちにとってはデカルトの知覚が何かだけでなく、彼女独自の知覚のあることが問われてこなければならない。また彼女独自の知覚が若干20歳前後にて脱稿した学士論文に初出することに驚きを禁じ得ないとともに、今日かかる知覚についての一考を課する必要がある。それは彼女独自の知覚がわたしたちをして混迷し続ける現代の認識論的思想の脱却に関与させ得るやもしれないからである⁽¹⁸⁾。

さて、彼女の引用文を含めた以上のことを前提に、筆者がデカルトの知覚や彼女独自の知覚につき追って語り始めるにしろ、語るものはおのずと両者の認識の起こりに関する問題にしぼられよう。なぜかという、彼女によるデカルト的思惟の矛盾や難点がこの認識の起こりにあつて見出されるからである。今はそれのみを述べるにとどめる。ここでは両者の認識の起こりの考察への了解すべきことを予め記す方が先になるのである。

まず、註(17)の結論の〈デカルト的思惟に従わずに〉の語句によっても、彼女独自の知覚のあることがみてとれる。もし彼女がデカルト的思惟に従うと書くならば、たとえば註(16)の第二部の〈わたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている〉とした文章は記されない、逆にデカルト的思惟に見立てられるやもしれぬであろう。註(17)は註(16)に依拠した語句でしかなく、しかもその〈デカルト的思惟〉とは註(5)から註(7)でいう〈真なる思惟〉〈純粋な思惟〉〈万人に共通な思惟〉であった。それゆえ、註(17)にかかるごとく書かれるかぎり、それもまた註(16)もデカルト的思惟に似つかない語句と文章、反って彼女独自の知覚(思惟)を照し出す語句と文章にならざるを得ない。これらの註からは彼女が彼女独自の知覚(思惟)をもとにデカルト的思惟に言及した(この逆ではない)といえるのであって、それなしにデカルト的思惟の矛盾や難点がくか

いまみ〉られるとの結論での語句は記されるはずがない。

次に、この註(16)の引用文はそれならデカルト的思惟に関知しないとみればよいのか。それはできない。なぜなら彼女は引用した註(17)の語句に続けて、〈その(デカルト的思惟の)動きを模倣する〉というからである。つまり、註(16)はたんに彼女独自の知覚(思惟)の動きだけでなく、あわせて〈デカルト的思惟の動き〉を表わすとみなしなければならぬ文章である。またこの〈動き〉とは筆者が前記をもした〈密かな展開〉の〈展開〉と同意である。かつ〈動き(展開)〉は、彼女では認識の起こりに発した〈わたし(精神)〉での認識の順序のひとつをさし、デカルトではデカルト的思惟の探求のための手順のひとつを示唆させよう。この手順は註(12)から註(14)に順次代表される。だから次の検討はかかる註をデカルトの引用文の導入で確かめることと、果たして註と引用文の一致が筆者に容認されるかである。この検討なくば、彼女の批判があるにせよ、その中味が、まして認識の起こりに対する両者の異同が明かされないからである。

なおまた筆者はここで、デカルトの思惟(知覚)の動きが第一部より圧倒して第二部に、しかも後者のおよそ前半部分で語られ、それにあわせるかのごとく、彼女独自の知覚が密かにも論じられていると再確認し、さらに第二部のおよそ後半部分では、デカルトの知覚の動きよりもむしろ彼女独自の知覚が全面で展開されると捉える一方、彼女は第一部や第二部での認識の起こりにかかわるある面につき多少〈デカルト説〉にならい継承する感なきにしもないが、それでも学士論文全体からみて、〈デカルト説〉(あるいはカント説)とは異質の知覚説(認識論)を打ち出しもする哲学者であるといわねばならない。

そこでまずは、〈デカルト説にならい継承する〉〈ある面〉とは何かが問われよう。もはや察知されるごとく、かかる〈ある面〉のみが註(4)や註(13)における〈推測したり(する)〉⁽¹⁹⁾と〈想像〉のことでなく、註(10)や註(12)における〈sens ou sensation 感覚(的印象)〉をさすのはいうまでもなからう。そして、彼女独自の知覚は同じ註(12)に記される通り、この〈感覚(的印象)を考慮に入れない〉のである。これによって、彼女の知覚説もデカルトの知覚説と〈ある面〉にて同様であることが理解されるからして、〈デカルト説にならい継承する〉といい得る。ただしそうはいつても、〈感覚(的印象)を考慮に入れない〉とする点線部分の意味は両者で異なる。つまりそれは彼女に

あって彼女の知覚説から〈感覚(的印象)〉あるいは〈想像〉を完全に排除することにはない。〈感覚(的印象)〉は彼女にいわせると、くいわば何ものでもない⁽²⁰⁾能力でしかない。〈感覚(的印象)〉はその能力ゆえに、筆者によって完全に排除されないと指摘し得る事由になると同時に、彼女にとって彼女独自の知覚における真正な能力であると認めるのでなくとも、ときに彼女が感覚(的印象)をカントにみるような世間的・一般的な知覚として容認するかぎりは、彼女独自の知覚のひとつに加えられる能力になることが許容されるのである。〈感覚(的印象)〉について現段階で語られることはこれ以外にないというにしても、他方の〈想像〉はどうなのか。〈想像〉の方はここでは〈感覚(的印象)〉とは異なり、彼女独自の知覚のうちに公に取り入れられている能力であると述べるだけにする。

だが以上の〈感覚(的印象)〉はさらなる問題を惹起させよう。学士論文の序論や第一部が、前者で人類の思惟を註(10)の〈感覚と情念との印象に委ねられた…思惟〉(この場合は文脈上感覚の印象に委ねられた(のみの)…思惟となる)よりも、デカルト的思惟に見出し、後者でそのデカルト的思惟に対し、これが註(12)の〈感覚(的印象)を考慮に入れない〉ことをもって始まり順次論じられるにもかかわらず、この流れを受けて成り立つ第二部はまさに転なる問題の転換の部であればこそ、その冒頭から、〈わたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている〉と記されるにせよ、それならなおさらこの文章は何を物語るかが問われるのであって、それを整理する必要があるだろう。

筆者は、註(16)の文章が第一に、序論や第一部の流れにそくしつつ、しかしそれらの部では不問に付されていたデカルト的思惟およびその動きにかかわる快や苦を提示する文章であること、第二に、世間的・一般的な知覚を示す文章であること(この知覚は感覚(的印象)を排除するデカルト的思惟に源を発するのは確かだが(〈万人に共通な思惟〉などを想起しよう)、それでもカントの登場以来今日まで、デカルト的思惟であるより、これを受けて成るカント的思惟をさすであろう。だがカントが既存の理性を批判し、理性の新たな用法を提唱するにせよ、その理性(または悟性や知性)の能力である思惟において、デカルト的思惟とどこが相違するのか。註(16)の文章にかぎれば、相違はカントにあって、悟性(思惟)が感性(Sinnlichkeit)、つまり快や苦(感覚(的印象))を素材に活用させることなのであろう⁽²¹⁾)、第三に、彼女が彼女独自の

知覚（思惟）を説くその出発点に立つ文章であること（この読みでも、かかる知覚（思惟）は快や苦を中心にして問いかけられよう）を同時に物語るとみることができる。いいかえると、第二部のこの文章でみた三ケースの快や苦はいずれも、認識の起こりにとって不可欠なタームになるが、とまれその文章に続く前半部分にかけては、デカルト的思惟の動きとの関係で問われながら、かつ世間的・一般的な知覚と彼女独自の知覚の動きとがさねあわされて密かにも語られる、またその後半部分にあっては、とりわけ彼女独自の知覚の動きのみとして語られるということである。

以上の三ケースは次回にもわたって証明されるにしても、註(16)のこの文章で以上を整理するまえに問題にすべきだったのはむしろ、認識の起こりをみるために、第二部註(16)での〈わたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている〉と、第一部註(12)でのデカルト的思惟は〈感覚（的印象）を考慮に入れない〉とは、この〈快あるいは苦〉が第二部で初出であるにもかかわらず、つまり第一部（または序論）では不問にされると前記したにもかかわらず、つながりがあるか否かを知ることにある。しかしこれらは、〈起・承・転・結〉たる論文に立つ以上、一貫性や整合性を保有せねばならぬから、つながりがあると認めざるを得ないし、だからこそ快や苦が感覚（的印象）にかかわるかが筆者の主張するデカルト的思惟、世間的・一般的な知覚と彼女独自の知覚のケースに対して問われねばならなかったのである。それでもデカルト的思惟のケースにあっても、かかる問いが可能になるのか。

そこで第二部註(16)の文章の〈快や苦〉が序論や第一部での継続にあるとして、何が〈快や苦〉をもたらずのかから確かめる必要がある。いいかえると快や苦とは何にかかわるのかということである。この何には、これまで述べた諸能力の想像が該当するのか。想像は当初より精神の能力であって、その点思惟と同様であり、そこでは能動的能力なのである。だから想像はそれのみで〈快や苦〉をもたらずのでも、〈快や苦〉につながる能力でもない。すると思惟でも想像でもない以上、認識の起こりとしても残るのはただ〈感覚（的印象）〉になるだけである。そしてこれが上記の諸能力と異なって、精神のみでなく、身体にとって刺激となる能力である（〈快や苦〉はこの刺激が精神内に伝わったものとなろう）。たとえば今までの拙論に記したように、フロイトは「快や不快（苦）の感覚」があると指摘するし、さらにはカントが「わたしたちがあ

る対象によって触発されるかぎり、その対象が表象能力へと働きかけた結果は、感覚 (Empfindung) である」と語るることによるかかる言などの感覚はもはや刺激をかつ精神への伝達をあらわす以外の何ものでもなからう。

彼女にあって〈快や苦〉にかかわる能力が想像よりまずは〈感覚 (的印象)〉であるとしてこだわるのは、これが〈何ものでもない〉刺激の能力にみなされる一方、唯一刺激の能力になるかが問われるからである。そこでこの彼女独自の知覚としてふさわしい能力は何かになるが、今はそれに答える段階ではない。ここは彼女は〈感覚 (的印象)〉に無関心であるにしる、なぜデカルトに対してだけはそれを〈考慮に入れない〉というのか、デカルトの引用文を参照し、その真意を確かめるべき段階であろう。

④ Et d'autant que j'aperçois beaucoup mieux ces choses-là (les couleurs, les sons, les saveurs, la douleur, et autres choses semblables) par les sens, par l'entremise desquels, et de la mémoire, elles semblent être parvenues jusqu'à mon imagination.⁽²²⁾ (括弧内筆者)

そしてわたしはこれらのもの (色, 音, 味, 苦しみ, 他の同様なもの) を感覚によってよりよく知覚するのだから, これらのものは感覚から記憶を介して想像にまで到達されるようにみえる。

⑤ De plus j'ai senti que ce corps (une tête, des mains, des pieds, et tous les autres membres) était placé entre beaucoup d'autres, desquels il était capable de recevoir diverses commodités et incommodités, et je remarquais ces commodités par un certain sentiment de plaisir ou de volupté, et ces incommodités par un sentiment de douleur.⁽²²⁾ (括弧内や傍線部分は筆者)

さらにわたしはこの身体 (頭, 手, 足, 他のすべての肢体) が他の多くの物体のあいだに位置づけられており, これらの物体からさまざまな好都合や不都合を受け取り得ることを感覚した。そしてわたしは好都合のある種の快の感覚によって, 不都合を苦の感覚によって見分けていた, と。

⑤の〈この身体 (頭, 手, 足, 他のすべての肢体)〉がもたらすであろう④

の〈これらのもの（色，音，味，苦しみ，他の同様なもの）〉こそ，デカルトや彼女にあってそれぞれ④の〈感覚〉sens や〈感覚（的印象）〉sensation であり，おのおのが認識の起こりに関係する能力となる。認識の起こりとは精神としての始まりをさす。それゆえ精神内での諸能力の〈動き〉と区別されるべきである。④の〈感覚から記憶を介して想像にまで到達される〉ことが動き（手順）の一例である。

◎ Je suis le même qui sens, c'est-à-dire qui reçois et connais les choses comme par les organes des sens.⁽²⁴⁾

この同じわたしは感覚するものである。すなわち事物を感覚器を介して受け入れたり，認識したりするものである。

④の sens は◎から，精神よりみれば〈わたし（精神）〉がその外部にある事物を〈感覚器を介して〉〈受け入れ〉る能力，またこの認識の起こりによって，実際は感覚なる身体からくる能力になる。だが一方デカルトのどの作品にも彼女が使用する sensation が出てこない⁽²⁵⁾。しかし〈感覚（的印象）〉も彼女にあってデカルトの用いる sens か〈色，音，味，苦しみ〉などの意味で捉える必要がある。だがそれよりもここでは同じ sen- で綴られる⑤の sentiment や⑥と◎の sentir の方が問題となる。

⑥にあるその sentiment はそこに〈わたしは好都合をある種の快の感覚（sentiment）によって，不都合を苦の感覚（sentiment）によって見分けていた〉とあるような〈感覚〉の訳語になるが，しかしこの〈感覚〉はデカルトが同じく使用する sens とは異なる。⑥の傍線部分中の〈好都合や不都合〉に着目しよう。それぞれを〈わたし〉は〈受け取り得る〉し，快や苦の〈感覚〉によって見分けていた〉とすると，sentiment は④の〈色，音，味，苦しみ〉，⑥の〈物体〉や◎の〈事物〉の感覚 sens と無関係な感覚であり，精神で新たに生じる感覚になる。好・不都合を〈受け取り得る〉のは◎の〈受け入れる〉と同様，精神こそが実現する。精神の好・不都合は，快や苦の〈感覚〉が可能にするが，実際は好・不都合を〈受け取り得る〉という能動，つまりは〈感覚する sentir〉ことで成る。だから sentir が sentiment ともなる。なおここ

に㊸の傍線部分と註(16)の言い回しが相似するといえる。だがそれは、デカルトを記した学士論文の証しとなるにしろ、それでも註(16)の㊸に〈空、雲、風、石、太陽〉の〈対象のうち〉と書かれる以上、彼女にあっては精神の外部にある〈物体や事物〉の感覚(カントもいう刺激なる感覚)がそのまま精神で反射することを示唆するだけである(同㊸の〈感覚する〉も精神内での〈快や苦〉の反射をさす)。

それゆえ㊸や㊸の〈苦しみ(苦)〉に同じ *douleur* の単語使用の例でも、㊸㊸の単語は㊸が *sens*, ㊸が *sentiment* に相当する点で異なろう。すなわちいずれの〈苦〉も感覚に相違ないが、㊸が身体感覚、㊸が精神感覚であり、しかも㊸㊸の感覚は相互の関係を有しないのである。〈快〉もむろん以上と同様である。だが彼女の場合は、まず〈快や苦〉も〈対象のうち〉にあることを明確にし、これらがそのまま精神に受容されるのだから、精神の〈快や苦 sensation〉ともなるわけである。この精神での反射(それは刺激の量にかかわる)である *sensation* は、強いて反射の意味を不問になすとすれば、デカルトのいう *sentiment* に置換されるであろう。ところでデカルトは〈快〉に対して *volupté* (註(23)参照), *chatouillement*⁽²⁶⁾, *joie*⁽²⁷⁾ などの使用語よりも多く *plaisir* を用いており、この点彼女も同様である。また〈苦〉に対する *douleur* の使用が圧倒的に多いデカルトに比し、彼女は註(16)の *peine* をはじめ、他の箇所や諸作品に *douleur*, *souffrance* などを多用する(この〈快や苦〉のそれぞれの単語の異同の分析は別の機会に譲る)。ただ〈快や苦〉のどの単語の使用にせよ、確かなのは〈わたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている〉という懸案の文章にあって、彼女やデカルトのその〈快や苦〉がいずれも精神の能力として理解され、おのおのが *sensation* や *sentiment* によって代表されるということである。とすれば、彼女独自の知覚のひとつのこのことはともかく、かかる文章には少なからず、*sentiment* である〈快や苦〉を取り込んだデカルト的思惟のあることがここに至ってようやく明らかにされるであろう。

このデカルト的思惟はそれでも、彼女が註(14)で語ることと比較して、前段だけをもって彼女の指摘する註(5)から註(7)までの〈真なる思惟〉〈純粋な思惟〉〈万人に共通な思惟〉には決してなり得ないのである。だから筆者にとっても問題になるのは、それこそデカルト的思惟とは何かなのである。以下

はそれに関連しよう問題の提示と筆者なりの解答であるが、その解答はおそらく彼女が〈デカルト説〉を批判する事由に重なるであろう。

デカルトは何を起因にして、彼女のいう〈感覚(的)印象〉を考慮に入れないのか、まず sens について以下の㉑と㉒でみることにしよう。

㉑ J'ai observé plusieurs fois que des tours, qui de loin m'avaient semblé rondes, me paraissaient de près être carées, et que des colosses, élevés sur les plus hauts sommets de ces tours, me paraissaient de petites statues à les regarder d'en bas.⁽²⁸⁾

わたしはたびたび、遠くからは丸いようにみえた塔が間近からは四角のようにみえたり、その塔の天辺に建てられる大きな彫像が地上からみやると小さな立像のようにみえたりすることをみてとった。

㉒ D'autant que nous n'avons point maintenant d'autre dessein que de vaquer à la recherche de la vérité, nous douterons en premier lieu si, de toutes les choses qui sont tombées sous nos sens ou que nous avons jamais imaginées, il y en a quelques-unes qui soient véritablement dans le monde, tant à cause que nous savons par expérience que nos sens nous ont trompés en plusieurs rencontres, et qu'il y aurait de l'imprudance de nous trop fier à ceux qui nous ont trompés, quand même ce n'aurait été qu'une fois.⁽²⁹⁾

いまわたしたちはもっぱら真理の探求にはげむ以外にないのだから、わたしたちは感覚する事物や想像する事物のなかに真に存在するものがあるかどうかを疑うことにしよう。というのはわたしたちは感覚がときどき誤るという経験を知っているが、たとえ一度でもわたしたちを欺いた感覚には決して信用しないのが賢明だからである。

㉑の〈みえる〉や〈みてとる〉と㉒の sens を同様な感覚とみなし参照すれば、それは〈感覚 sens〉が〈誤る〉〈わたしたちを欺く〉がゆえに、デカルトの思惟には〈感覚 sens〉(彼女では sens と同じ用法の〈感覚(的)印象〉 sensation) がかわらない(または〈考慮に入れ〉られない)ことを理解させる以外になかろう。デカルト使用の sens と彼女使用の sensation を同一と

なすことは、先の註(10)にある〈impression des sens (感覚的印象)〉なる語句の表現から、あるいは㉔の感覚器は感覚(的印象)を生み出すということから求められる。また〈感覚〉がなぜ〈誤る〉か〈欺く〉かは㉕にある〈塔〉の例の通りである。同じ〈塔〉を異なる場所(または時間)によってみると、〈感覚〉はその都度の印象をもたらすために、たとえおのおのの印象は正しいと知り得ようとも、デカルトにはそのどれが〈真に存在する〉のか〈疑〉わしくみえる点で〈誤る〉〈欺く〉ものとしてしか捉えられないのである。だから彼女がデカルト的の思惟における〈感覚(的印象) sensation を考慮に入れない〉と指摘することは、デカルトが刺激なる〈感覚 sens〉を認識の起りではむろん、デカルト的の思惟の成立にさえ必要な能力とは認めない(ne jamais savoir)ことを明示する(ちなみに〈認める〉は㉔内に用いられる connaîtreではなく、㉕内での savoir をさしている⁽³¹⁾)。しかしなぜデカルトは sens を認めない姿勢を保持し得るのか。それは一に、デカルト的の思惟は㉕でいう〈真理の探求〉のためにこそある(これは彼女の引用文註(12)でも語られることである)。二に、〈真理の探求〉においては〈感覚 sens〉は身体に属し、精神にかかわるのではないからである。次の引用文㉖がそのまったき無関係さを証明する。㉖は精神の sentiment を表わす文章である。だが傍線部分からは sens が〈わたしにかかわ〉らないことをも読み取れるのである。

㉖ J'étais touché des sentiments de plaisir et de douleur en ses parties, et non pas en celles des autres corps qui en sont séparés.⁽³²⁾ (傍線部分筆者)

快や苦の感覚は、その感覚の部分においてわたしにかかわり、その感覚の部分から切り離される他の身体の部分においてわたしにかかわることはなかった。

註(32)の短文は繰返すが、〈感覚 sens〉が sentiment から〈切り離される〉身体に属する、つまり精神と無関係であること、かつ快や苦の感覚 sentiment が精神の能力であることを暗示している。そのうえこの文章はこれらの能力がなぜそう捉えられるかの事由を質さざるを得なくするだけでなく、そのもととなる思想さえ盛り込ませてあるとみる点で、軽視できない引用文となる。そのもととなる思想とはもとより心身(物心)二元論のそれである。こ

の詳細はここでは割愛させるほかないが、それでもこれらの能力がなぜそう捉えられるかの事由を探るためには多少の説明が必要となろう。その説明からは当然、〈快や苦の感覚 sentiment〉が〈わたし（精神）〉に属し、〈他の身体の部分〉に属さないということが結語される。それゆえ〈感覚 sens〉は快と苦の〈感覚の部分から切り離された他の身体の部分〉（〈他〉にはデカルトのいう〈外的感覚〉〈内的感覚〉が含まれるとみる）に属してしまうことになる。だからこそ、デカルトのいう感覚に身体における sens と精神における sentiment があるのは、しかもそれぞれが切り離されてあるのはなぜかという事由が具体的に求められてくるのである。これらは身体や精神がおのおの〈実体 substance〉とみなされるところに起因してこようが、その実体とは何かこれもまずはデカルトに聞いてみなければなるまい。

© Lorsque je pense que la pierre est une substance, ou bien une chose qui de soi est capable d'exister; puis que je suis une substance, quoique je conçoive bien que je suis une chose qui pense, et non étendue; et que la pierre au contraire est une chose étendue, et qui ne pense point...⁽³³⁾

わたしが石は実体であると、あるいは石それ自身で存在し得るものであると、次にわたしは実体であると思惟するとき、わたしはわたしが思惟するものであり、延長をもつものではないこと、反対に石は延長をもつものであり、少しも思惟するものではないことをよく理解するのであるが…。

©の〈石〉なる物体と同じであるのが身体である。だからそこに属する〈感覚 sens〉も〈それ自身で存在し得る〉が、〈少しも思惟するものではない〉物体と同様になり、かかる内容がまた sens をして身体に位置づけさせるのである。逆からは、〈わたし〉なる精神が〈思惟するものである〉かぎり、〈感覚 sentiment〉は〈わたし〉なる精神に属する能力になるといえる。

ここからはさらに四つの問いが投げかけられるであろう。デカルト的思惟にあって、一は sentiment とは何かという問題、二は sentiment と sens が本当に切り離されて捉えられるかの問題、三は sentiment と〈思惟する〉ことに関する問題、四は〈わたし〉あるいは精神とは何かという問題である。筆者はここで、すでに取り上げたデカルトの引用文を再び参照しつつ、次なる引

用文も加えて四つの問題をみていくことにする。

㊦ Nous ne considérons ordinairement les corps qui sont proches de nous, qu'en tant qu'ils causent dans les organes de nos sens des impressions si fortes que nous pouvons les sentir.⁽³⁴⁾ (傍線部分筆者)

わたしたちは、身体がわたしたちの感覚器においてあまりに強い諸印象を引き起こすので、わたしたちがその諸印象を感覚することができるかぎりでのみ、一般に身体がわたしたちの真近にあるということを考慮する。

㊦はただしある条件のもとでの引用文である。ある条件とは、《Que le mot de vide pris selon l'usage ordinaire n'exclut point toute sorte de corps》(日常的用法に応じて理解される単語の真空は、あらゆる種類の物体を少しも排除しないということ)⁽³⁵⁾の表題下の〈日常的用法に応じて〉である。そのことを以下で論ずる際の注意事項とするにせよ、まず確かめるべきは、㊦と㊧を除いては、㊨㊩㊪㊫のなかにはむしろ、この㊦にさえ sentiment なる単語がないということにある。それで sentiment は何かを問えようか。問え得るのである。そのためにここでこそ、筆者には sentir (感覚する) の考察がなされねばならない。そこでは当然、sentir は sentiment と関係すると予想し得るが、㊬㊭㊮に出ている sentir のうち、とくに㊭や㊮に代表させてその関係があるかどうかからみていこう。

㊭と㊮にあって、sentir はそれぞれ〈わたしは感覚するものである〉、〈わたしたちがその諸印象を感覚する〉とある。これは sentir の二用法をさす。その一が〈真理の探求〉での用法であり、それを㊭に取る。㊭の〈同じわたしは…認識したりする〉との記述がまたこれを確かにする。すなわち sentir はconnaître (認識する) と同様、〈同じわたし (精神)〉のもののみなされるということである (ただし㊦の傍線部分 (とくに上記の文章) が sentir の二の〈日常的用法〉として語られるがゆえに、ここではじめて sentir は彼女のいう〈感覚 (的印象)〉を精神で〈感覚する〉ことをも含意させるといい得る)。だが sentir にとって、なぜ connaître と同じなのか。これは sentir もそれと同様能動の能力にほかならないからである。ここから想像するは imagination, 思惟する (認識する) は pensée の能力に属するか、後者自体であるように、

sentir と sentiment の関係も同じなのである。逆にいうと、精神の sentiment は感覚するとみてよいのであり、この感覚がたとえば同じ感覚としての〈快や苦〉の表象を表出させる役割をもつのである。そしてこれが sentiment とは何かの答になるというものである。(sentiment は参照した主要五作品のうち『省察』と『哲学の原理』に多用される。一般に感情と訳し得るそれは、ある場合にこの訳語で文脈を通じさせるが、他方 affection や émotion⁽³⁶⁾もあり、それらが感情として使用されるところからは、sentiment のすべてを感情に訳し得るとは決めつけられない。これが感覚と訳出するゆえんとなる⁽³⁷⁾。また sentir 使用の多い作品は前記二作品のほか、『方法序説』や『情念論』である⁽³⁸⁾。なおここに取り上げた彼女の引用文中、sentir が記されるのは註(16)に四回(訳のうえでは五回)だけであるにせよ⁽³⁹⁾、そのすべてはデカルトのいう二つ目の sentir の用法においておよそ同様になろうと付記する。)

次に、㉔㉕㉖㉗にある〈感覚 sens〉の方はどうなるのであろうか。これを論ずるには、デカルトの㉔から㉗の引用文が註欄の作品で知ることく〈日常的用法〉である㉗を除いてすべて〈真理の探求〉を前提にすることということが不可欠である。そこにおいて、身体に属する〈感覚 sens〉は、㉕が語る通り〈それ自身で存在し得るもの〉だが、〈少しも思惟するものではない〉ために、その〈感覚 sens〉的印象を精神に関係(伝達)させ得ないとみる〈実体〉、別言すると〈感覚(身体)〉が今日的にいう反射(つまり〈感覚する sentir〉こと)を不可能にさせる〈実体〉に等しくなるのである。

それにもかかわらず、この〈真理の探求〉としての㉔に〈わたしは…事物を感覚器を介して受け入れたたり…する〉、またその㉕に〈感覚する事物や想像する事物〉とあるのは、〈感覚器〉(感覚器は㉗にもある)をして精神と関係せしめることを示唆させないか(実は㉔㉕も同様である)。㉔の〈受け入れる recevoir〉(この動詞は㉗にもある)とは〈能動〉以外の意味として〈感覚 sens〉的印象の〈わたし〉への刺激、精神への伝達をさしはしないか。㉕の〈感覚する事物〉は〈toutes les choses qui sont tombées sous nos sens〉の訳であるにせよ、その〈nos sens〉が精神的機能でしかない〈想像する〉ことと並置される以上、後者と同様にみなされはしないのか。

他方、㉗の〈日常的用法〉において、感覚器は〈諸印象〉を精神に関係させる器官となる。ところが感覚器が外部の対象からこの〈諸印象〉を刺激として

受容せずに、〈諸印象〉は感覚器ですら〈あまりに強い諸印象〉になり得ない。また〈あまりに強い諸印象〉になるとすれば、この〈諸印象〉は感覚器ですらに反射すること、それが精神に伝達されること（精神からみれば、かかる諸印象は前段で示す通り精神への刺激となり、〈強い〉は刺激の量をさす必要がある）が確実であろうし、今度は精神の sentiment が刺激たる〈諸印象〉を受容すること、つまり〈日常的用法〉にあっては㊸の〈好都合や不都合〉さえ〈諸印象〉に等しくなることを含んで、それらを〈快や苦の感覚〉として sentir することになろう。

〈日常的用法〉における身体と精神の関係は確かに〈真理の探求〉のこれらの関係より密接である。しかし両者の関係を今 sens と sentiment に代表させていうにしろ、〈日常的用法〉で問題なのはたとえば〈あまりに強い諸印象を引き起こす〉ほどの感覚器と、精神の sentiment の sentir との関係からして、デカルトは sens（身体）に対し〈引き起こす〉とのみ記し、なぜ sentiment に使った sentir を用いないか。この方が今日の心理学生理学的反射の知見に近いし、身体と精神もその sentir で整合をみるから、それこそ両者が密接に関係する〈日常的用法〉の心身合一にふさわしくないか。デカルトが sens の反射に精神における sentir すら使わないのは心身二元論を、つまり〈日常的用法〉より〈真理の探求〉をめざしたがゆえなのか。

sentiment と sens が本当に切り離されて捉えられるかの二の問題は前段からすれば、〈日常的用法〉では切り離されないが、同時に sens の反射に該当する語が明確でない点で、不確かにならざるを得ないといえようし、〈真理の探求〉では切り離されることになるであろう（切り離しを可能にするのは sentiment である。これはあたかも思惟と同じにみなされるばかりか、判断や意志さえもつがごとき読み取りが必要となる。この点は次回に詳述する）。すると〈日常的用法〉と〈真理の探求〉が否定・肯定の内容のままで容認される以外にならう。それだからこそ彼女は註(15)で〈デカルトのうちに不明瞭、難点、矛盾しか見出さない〉というのではないのか。たとえば、sens の反射にみあう語の不統一さが難点であり、sentir の二用法（一方は能動、他方は反射）が矛盾を招くほか、〈真理の探求〉や〈日常的用法〉の混交使用がそれら自体の矛盾をさらし出すだけでなく、sens は sentiment における〈好都合や不都合〉を含んでないのかどうか（㊸の傍線部分参照）、逆にいうと

sentimentのこれらの諸印象が sens にあるか否かを明確にしない不明瞭さは〈デカルト説〉の欠点をさす何ものでもないのである。

筆者はここでさらに〈デカルト説〉の矛盾、不明瞭、難点を取り上げるより、むしろ三の sentiment と〈思惟する〉ことに関する問題に目をむける必要がある。なぜなら彼女のいう不明瞭、難点、矛盾を超えても、デカルトは何を主張したかったのか問われるからである。それは思惟である。だから三の問題では思惟が sentiment とどう関係するかみればよい。それには今一度くわたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている〉が参照されよう。デカルト的思惟において、sentiment は精神の能力としての〈快や苦の感覚〉であると同時に、精神にとってあたかもカントのいうがごとき思惟（悟性）の〈素材〉となる、別言すると sentiment は精神（思惟）側に最初の〈素材〉として働きかけよう能力でしかなく、精神はそのもとにこれと同じ能動的能力たる想像や思惟などが作用しあうところなのである。それゆえ三の問題は、身体問題を対象にしない精神だけのそれとなり、快や苦（sentiment）と関係せずにおれない思惟をして、〈わたしたちの思惟は快あるいは苦を伴っている〉に必然的に結びつかせるように語られてくるわけである。要するにこの文章に対し、筆者はデカルト的思惟も快や苦の sentiment を伴うことを先に sentiment でみてきたが、当然ここでの思惟の視点からも sentiment と思惟は関係するといえることは思惟が sentiment をデカルト的思惟に確実に盛り込ませることによって証明できるのである。そればかりか、この文章は、sentiment が㊦㊧㊨の通り、精神における最初の能力になるとの指摘において、それがデカルト的思惟の〈動き（展開）〉にかかわるかどうかの問題を提起し得るであろう。

① Ce sont ces diverses pensées de notre âme, qui viennent immédiatement des mouvements qui sont excités par l'entremise des nerfs dans le cerveau, que nous appelons proprement nos sentiment, ou bien les perceptions de nos sens.⁽⁴⁰⁾

わたしたちの精神のさまざまな思惟は、脳の神経を介して興奮させられる動きに直接由来する。その動きはわたしたちによって、まさしくわたしたちの感覚、すなわちわたしたちの感覚（的印象）たる知覚と呼ばれるのである。（括弧内筆者）

『哲学の原理』第四部に記されるこの引用文中の〈動き〉は筆者がいう〈動き(展開)〉にただちに関知しないかのようにみえる。なぜなら①の〈動き〉とは sentiment であり、それを明かすためにすぎないからである。だが〈思惟は…動きに直接由来〉し、この動き sentiment によってくさまざまな思惟が生み出されることから、〈動き(これは思惟の動きともなる)〉は筆者がいう思惟の〈動き(展開)〉とかかわらざるを得なくなる。とすればこのくさまざまな思惟から、これも彼女が二番目や三番目の〈手続き〉⁽⁴¹⁾としての imagination, そして sentiment さえも捨て去ることをのちにみる筆者にとって(一番目は sens なる感覚(的印象)である)、これが思惟の〈動き(展開)〉でなくて何んであろうか。まさに①こそはデカルト的思惟の展開の出発点をなすことを示唆させよう。筆者がこの動きをとりわけ展開と訳すのはかかる事由による。彼女の『デカルトにおける科学と知覚』にとっても前記した通り、その第二部前半がデカルト的思惟の展開部分に当たるし、そこに同時に彼女独自の知覚(思惟)を密かに語り、かつ世間的・一般的な思惟を暗に含ませ示しながら、後半部分に突入しては彼女独自の知覚が展開されるのである。

『デカルトにおける科学と知覚』の第二部の思惟は第一部の註(12)(13)の前提で成るだけでなく、それをして〈快や苦の感覚 sentiment〉を伴わしめるデカルト的思惟がその結語に等しい註(14)にむけて、さらにいかなる〈動き(展開)〉をみせるかはかかる sentiment に焦点を当て語られる。だから第二部をみることは筆者の提起した三や四の問題に答を出すことに関連する。前段で彼女がかかる〈sentiment さえ捨て去る〉という筆者の明記にあって、それは〈sentiment と〈思惟する〉ことに関する〉三の問題から四の問題に移行する際の橋わたしとなる事由に相当してくる。そしてこの sentiment と思惟がかかわることを証明する引用文こそが①なのである。なぜなら①によって、思惟は当初より〈快や苦〉を伴う sentiment で構成されていることが明かされるからである。この思惟は同時に、デカルト的思惟の展開の出発点であることも意味したのだから、くさまざまな思惟がこれを契機に生み出されよう。だがデカルトが四の問題として、〈わたし〉あるいは精神とは何かを自問するとき、別言すると註(14)において、これこそデカルト的思惟であるといえる思惟が見出されるとき、そこから想像ばかりか、このかかる〈sentiment さえ捨て去〉られてしまうというわけである。だがここでは、四の問題に関す

るその証明はデカルトの多くの引用文の参照を課すので、次回に譲るというしかないし、そのときこの引用文から獲得されよう註(14)あるいは註(12)(13)への答は、彼女がみるデカルト的思惟の展開に添って当然導き出されると記すにとどめるしかなかろう。

それはともかく、〈日常的用法〉における①の *sens* の〈動き（展開）〉は非能動的能力になろう。〈感覚 *sentiment*, すなわち…感覚（的印象）*sens* たる知覚〉という語句から、それは *sens* の *sentiment* 化あるいはその逆をも意味する。これまでに記した引用文中のⒶⒷⒸⒺⒻにおいて、およそ *sens* が精神にかかわる（伝達される）ことは予想できはしたが、たとえばこのように明確に *sens* が *sentiment* になるごとく理解し得る語句はこれが初出である。ただしすべてが *sens* の *sentiment* 化として生み出されるのではない。デカルトによれば、その例外が精神を原因としたり、精神に帰したりする *sentiment*, または *émotion*, *passion* である（しかしこれら三つの能力は〈真理の探求〉では容認されない）。だから外的感覚・内的感覚のみが *sens* の *sentiment* 化になろう（それゆえこれは二の問題の *sens* の〈日常的用法〉で〈不確かな〉といった点を否定しよう）。

しかし、一方で *sens* が *sentiment* 化すること、他方で *sens* が〈誤る、欺く、信用しない〉能力でしかないことはいかにして整合されるのか。デカルトが〈真理の探求〉でも *sens* の *sentiment*（精神）への伝達を認める（日常的用法とて然りである）ことをもってすれば、以下は整合し矛盾でなくなる。*sens* の一つ一つはその都度正しく精神に受け入れられるがままとなる。ただそのいずれが〈真に存在する〉か明かされんとして、*sens* は〈誤る〉以下とされるごとく疑われる。しかしそれは疑うという思惟が介入しての一つの判断を下すにはかならない。かつさらなる思惟作用で、*sens* をば彼女のいうと〈*faire abstraction de*（考慮（思惟作用）に入れぬ、排除する、捨てる）〉だけであり、〈真理の探求〉における精神（思惟）にとりこの *sens*, その *sentiment* 化のもの、精神を原因とする *sentiment* も無関係で無視される能力になるからである。しかし彼女や筆者からいえば、心身二元論下の〈真理の探求〉で無関係で無視されよう能力、わけても *sens* の *sentiment* 化のものを精神にあえて立てるのは、精神にさえ感覚（思惟しないもの）がある証しになる、別言するとこの *sentiment* 化の *sens* が精神にあるゆえ精神の *sens*

になるわけだから矛盾でしかないであろう。また〈真理の探求〉まして〈日常的用法〉でも、sens が精神に伝達されるとはいえ⁽⁴²⁾、前記の通りその sens の伝達のことデカルトから読み取れない点で不明瞭なのである。さらに感覚にかかわる一切の能力（とくに sens の sentiment 化の sens, sens のままの sens と精神を原因とする sentiment）が場所や時間あるいはその混交による sens の印象の感じ方がまちまちであるにもかかわらず、それら自身を思惟がどうして区別させたり、捨て去ったりすることができるのかという難点が依然として残るのである。

むろんこの感覚にかかわる一切の能力を捨て去るとするのは彼女も同様であり、同時に彼女が〈感覚（的印象）を考慮に入れない〉とみなす真意もそこにあるといえよう。ただデカルトでは sens（身体）が〈日常的用法〉を除いて問われないことは確かだが、一方で註(12)のごとく〈真理の探求〉のもとに語るにあって、彼女はかかる矛盾・不明瞭・難点を浮き出させるか解消させるためにかはとにかく、sens の sentiment 化の sens (sensation) はむろん、sens (sensation) さえ精神に属する能動ではない能力として捉えるかのようである⁽⁴³⁾。なぜかをみるには、それがおそらく彼女の sentir の語に対する理解がデカルトと相違すること⁽⁴⁴⁾、それこそ sentir が彼女独自の知覚にとって問題になることが明確にされたのちでなければならないのである（もはや制限紙数に達したので、これを問うのは、また四の問題やその他も同様次回にする予定である）。

〔統〕

註

今回の参考文献は以下の通りであり、各註はその文献に付した記号A-Dに従う。

- A. 新潟大学教養部研究紀要①第17集, 1986年, ②第20集, 1989年。
- B. 新潟大学人文学部人文科学研究①第88輯, 1995年, ②第90輯, 1996年, ③第91輯, 1996年。
- C. Simone Weil 《Sur la science-Science et perception dans Descartes-》Gallimard.
- D. Descartes 《Œuvres Lettres》Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard.① 《Règles pour la direction de l'esprit》② 《Discours de la méthode》③ 《Méditations》

㊦ 《Les principes de la philosophie》 ㊧ 《Les passions de l'âme》.

- (1) A. ㊦にこの素描があるし、㊦の p.56〔5〕以下参照。
- (2) B. ㊦に記されたことがここに証明されよう。すなわち p.65の通り、知覚（認識論）を出発点としての各個別の思想（たとえば科学）が成り立つということである。
- (3) C. p.12。〈そのとき〉とは〈タレスが幾何学を創始したとき〉である（《…; (du) moment où Thalés, …inventa la géométrie》）。
- (4) C. p.12。《L'humanité n'avait fait jusque-là qu'éprouver et conjecturer》.
- (5) C. p.12。
- (6) C. p.13。
- (7) C. p.13, p.14, p.17。
- (8) C. p.12。
- (9) C. p.12。
- (10) C. p.p.11-12。
- (11) C. p.47。
- (12) C. p.19。
- (13) C. p.29。
- (14) C. p.47。
- (15) C. p.p.46-47。
- (16) C. p.p.49-50。
- (17) C. p.96。
- (18) 筆者はこれまでの紀要で彼女独自の知覚(感受性)がたとえば心身論、現象学、量子論などのみなおしに影響を与えるであろうと述べた。
- (19) 〈conjecturer (推測する)〉には同義語として〈imaginer〉がある（《Grand Larousse de la langue française》 vol. 2。p.892）
- (20) B. ㊦p.39註(12)参照。
- (21) ㊦㊦II以下参照 (p.p.72-81)。
- (22) D. ㊦A p.320。
- (23) D. ㊦B p.320。
- (24) D. ㊦C p.279。
- (25) D. のいずれの作品にもない。
- (26) D. ㊦p.739など。
- (27) D. ㊦p.748など。
- (28) D. ㊦D p.322。
- (29) D. ㊦第一部㊦p.572。また同様の主旨のもの㊦p.268や㊦p.147。

- (30) 註(34)参照。そこでは要するに *impression des sens* となろう。
- (31) B. ⊙p.p.42-43参照。
- (32) D. ⊙⊕p.321。
- (33) D. ⊙⊙p.293。
- (34) D. ⊖⊕p.620。
- (35) D. ⊖p.620。
- (36) D. の五作品中 *affection* 17回, *émotion* は30回の使用。
- (37) D. 同様に⊙30回, ⊖50回の使用。
- (38) D. 同様に⊕23回, ⊙45回, ⊖47回, ⊕45回。
- (39) C. p.49. この作品全体で *sentir* は p.49も含め24回の使用。
- (40) D. ⊖第四部⊕p.654。
- (41) 註(12)参照。そこに感覚(的印象)が〈最初の手続き〉のものとしてある。
- (42) 感覚器—求心性神経路—大脳皮質という各々の分析器がその都度受容し興奮を起こす(刺激と反射)ことによって伝達させるのは今日の常識である。
- (43) B. ⊙の註(2)の⊙にあるように〈*plaisir, souffrance, sensation*〉は並置する。筆者はこれを分けとみる。なお前者二つを *sentiment* とみなし, p.32で感情と訳したが, 感覚と訂正する。ただ *sentiment* が感情となるには経緯がある。デカルトの *sentiment* をカントが *Sinnlichkeit* に, 後者の仏訳が *sensibilité* になったことであり, デカルトにその *sensibilité* は一度も使用されないだけか, たんに *insensibilité* (D. ⊖p.130)のみあることだ。
- (44) B. ⊖でみた通り (p.72), また同紀要第86輯(1994年)で証したように, 彼女の時代の教科書や辞典は彼女を別にして *sensation* や *sentiment* を *sentir* (感覚する, 感じる)として使う。デカルトはたとえばD. ⊙において *sentir de la chaleur* (p.287). *sentir de la douleur* (p.326, p.331)として用い, これをもって, つまり名詞を *sentir* することをもって, *sentiment* になるというから, これは今日的用法と異なる。*sentir un sentiment* の表現がないのである。それは *sentir* が *sentiment* (その逆も同様)だからである。